

はじめに

検索エンジンとウェブ情報が主流となっている現代において、図書館利用者教育の集客力はもとより、図書館そのものの集客力も下降しがちである。そして、その対策に苦慮している図書館が多いのではないだろうか。

本講義では、図書館が行う情報リテラシー教育を「学習」及び「ウェブ時代」というコンテキストの中で見直すことにより、図書館利用者教育及び図書館そのものの魅力と有効性を高めるための方策を提示することとしたい。

1. 学習というコンテキストの中での見直し

1.1 情報リテラシーのプロセス

「情報リテラシー」には様々な定義付けがあるが、北米大学図書館協会（ACRL）では次のように定義している。「情報リテラシーとは、情報の必要性を判断し、アクセスし、評価し、効果的に利用することができる能力のことである」¹⁾

このプロセスを図示し、実際の情報利用行動と対比させると、次のようになる。

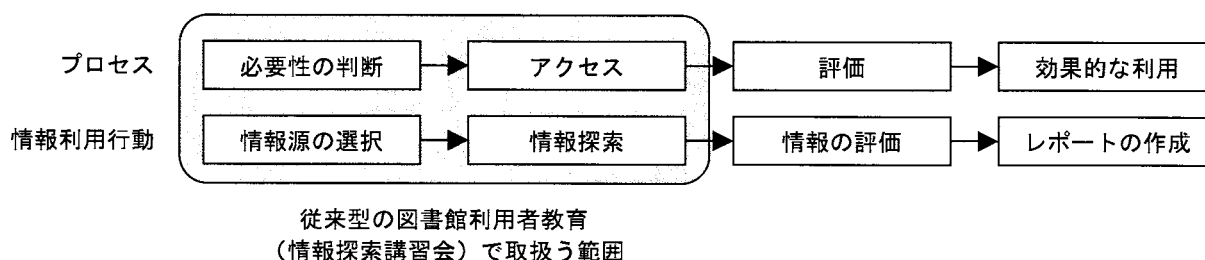


図1 情報リテラシーのプロセスと実際の情報利用行動

従来型の図書館利用者教育で中心的な役割を果たしていたのは、「情報探索（検索）講習会」である。その取扱う範囲は「情報源の選択」と「情報源の探索」の部分であり、多くの場合はまずそこから順をおって説明しているのではないだろうか。

しかし、このような情報探索中心の講習会の受講者数を増加させることは、困難な状況となってきた。また必修科目の中に組み込む形の講義方式をとったにせよ、学生の意欲と興味が減退してきているとの印象がある。講習会の集客力を上げ、受講者の意欲と興味を高めるための有効な方策はないものであろうか。

1.2 教授課程の逆転効果

このような状況の中で筆者は、次のような視点で講習会を編成することが有効と考え、現場での実践（講習会実施）を行っている。すなわち、とるべき情報利用行動を順にたどるのではなく、

学生が目標とする到達点とその目標の実現方法を先に教授することにより、情報探索の必要性を理解させるのである。この教授課程を図示すると、次のようになる。

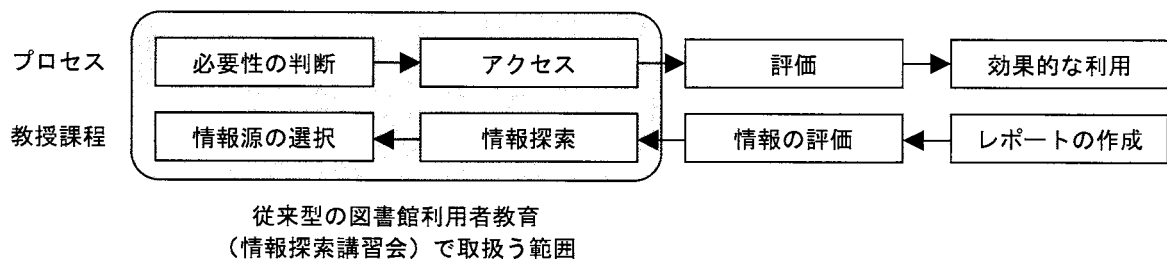


図 2 必要性を認識させるための教授課程の逆転

学習におけるレポート作成の重要性については、大多数の学生が経験的に十分認識している。まず始めに、上手にレポートを作成するには、どのような手順でどのような学習を行う必要があるかを説明する。様々な情報を探索し、それを素材として参照・引用しながら、自分の意見を陳述するのが大学生のレポートであることを、ここで理解させる。

次に、素材として利用する情報としては、検索エンジンから無料で入手できるウェブ情報もあるが、それ以上に有用な有料ウェブ情報資源や、ウェブでは利用できない図書館情報資源が多数存在することを説明する。そして、大学生としての学習や研究を進めるためには、それらを効率的かつ適切に利用する知識と技術を身につけなければならないことを示すのである。

ここまでの説明で多くの学生は、**図書館資料を活用するための情報探索や情報源の選択が、学習上非常に重要であることに、十分理解を示す。**そのため、その次の段階の情報探索の具体的説明には、大きな関心をもって臨むことができるのである。これは、利用者の「図書館への方向づけ」²⁾を高めるために有効な手法であると考えている。図書館の情報リテラシー教育は、学習というコンテキストの中で、すなわち情報リテラシーのプロセス全体を視野に入れて編成する必要があるのである。³⁾

2. ウェブ時代というコンテキストでの見直し

上記の教授課程の中の「情報の評価」と「情報源の選択」の部分で、明確にしておかなくてはならない問題がある。検索エンジンと無料ウェブ情報が全盛の現代において、学生たちがどのような情報利用行動をとっているのだろうか。そして、ウェブ情報をどのように位置づけて、情報リテラシー教育を行えばよいのだろうか。

2.1 情報利用行動に関する OCLC の調査結果

OCLC の調査レポート「Perceptions of libraries and information resources」⁴⁾は、現代の情報利用者の行動と嗜好について豊富な調査結果を提示している。本書の編者の一人デ・ローサ氏は、次のように述べている。「人々の情報探索における行動と嗜好、人々は図書館が提供する幅広くさまざまな電子的資源にどれだけ通じているのか、そして図書館は他の情報資源、とりわけウェブ上の資源と比較してどうなのかといったことを、もっと知りたかったのです」

この調査は、英語圏の6か国（米国、英国、オーストラリア、カナダ、インド、シンガポール）の14才から65才以上までの年代の情報利用者に対して行った、83項目の設問からなるものである。回答者は約3千5百名で、設問により結果には国別集計、年代別集計（米国内）、大学生集計、図書館カード所持者・非所持者集計がなされている。また、回答者の自由記述のコメントを「アネクドート・エビデンス（逸話的証言）」として多数収録しているところも興味深い。

現代がウェブ全盛時代であることを示す、いくつかの調査結果を示そう。

まず、探索しようと考えた情報源としては、検索エンジンが91%、図書館が55%となっている。しかし、実際に最初に選択するものとしては、検索エンジン80%、図書館11%と圧倒的に検索エンジンが優勢である。（表1）

表1 考慮する情報源・最初に選択する情報源

考慮する情報源	割合	最初に選択	割合
検索エンジン	91%	検索エンジン	80%
図書館（実際の）	55%	図書館（実際の）	11%
オンライン図書館	42%	オンライン図書館	6%
書店（実際の）	37%	書店（実際の）	2%
オンライン書店	30%	オンライン書店	2%

検索エンジンと図書館の優位性の比較では、信頼性と正確性の点で、検索エンジンよりも図書館が優れているという結果であるが、その差はわずかなものである（信頼性：検索エンジン40%、図書館60%。正確性：検索エンジン44%、図書館56%）。これに対して、即時性、便利さ、手軽さ、費用対効果、アクセス性の面では、圧倒的に検索エンジンが高い評価を得ている。（図3）

そして、情報としての信頼度においては、図書館資料の情報が高いとするもの22%、ウェブサイトの情報とするもの9%となっており、まだこの面に関しては図書館資料に優位性があるといえる。しかし、どちらも同等が69%ということは、78%の利用者がウェブの情報を信頼して使っているということの意味し、必ずしも楽観視できない状況になっているのである。（図4）

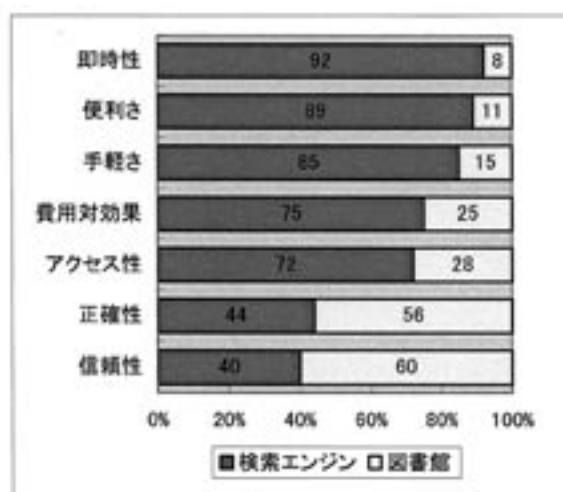


図3 検索エンジンと図書館の優位性の比較

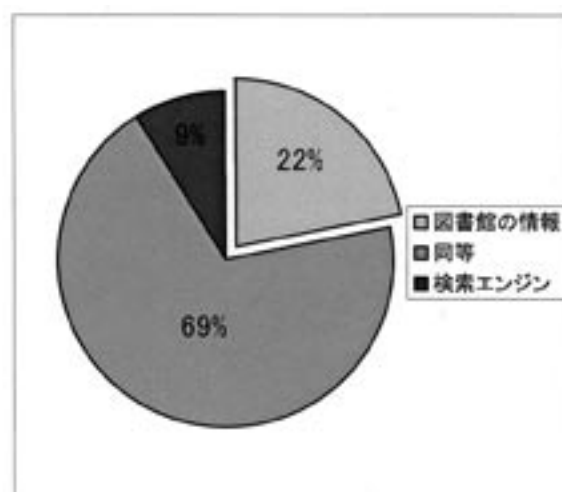


図4 情報としての信頼性が高いのは

そして、大学生の回答中の「ウェブ情報の信頼度を判断する要素」を見ると、自分の知識・常識が 83%、発信サイトの企業・組織が 69%で、複数サイトからの情報は 71%、信頼できる情報源の推奨が 68%、サイトの専門的見かけ 42%、著者 46%となっている。印刷物を含めて信頼できる複数の情報源を比較するという、基本的な学習方法の認知度が低下しつつあるのではないかと危惧している。

以上のような状況が英語圏に特有のものではないことは、筆者が担当している図書館学の履修生（134 名）に対するアンケート調査結果が、同様の結果を示したことからも明らかである。そのアンケートの利用頻度の調査項目では、ウェブ情報へのアクセス頻度が最も高く、週に 1 回以上利用する割合は約 92%となっている（毎日利用は 52.5%）。これに対して、図書館を週 1 回以上利用する割合は約 41%にすぎない。図書館のもつ物理的・地理的な制約からと推測するが、実際の図書館を利用するのは週 1 回から月 2～3 回というのが、大多数の学生の情報行動となっている。

2.2 ウェブ情報の位置づけ

以上のようなウェブ主流時代の現状認識のもと、検索エンジンから図書館へと適切に利用者を「方向づける」ためには、以下のようなウェブ情報の位置づけを行い、それを利用者に提示する必要があると考える。

(1) ウェブ情報の限界を認識させる

ホセ=マリー・グリフィスは「ウェブが図書館ではない理由」として、以下の 4 点を指摘している。⁵⁾

- ・情報がすべてそこにあるわけではない
- ・ウェブには基準や確証が欠けている
- ・ウェブ上の目録作業は最小限のものである
- ・ウェブでは情報の効率的な検索ができない

1998 年時点でのウェブ世界を前提とした、それぞれの指摘内容と理由は、再検証する必要があるが、おおむね 2006 年現在でも利用できるものとなっている。

より現代的な視点で執筆された文献には、以下の「検索エンジンの弱点」が示されている。⁶⁾

- ・検索できるのは表層ウェブの情報のみ
- ・同義語の展開ができない
- ・検索できるのは過去の情報
- ・網羅的すぎるゆえのノイズの多さ

これらウェブ情報の限界事項をよりよく理解させるためには、上記の事実の指摘だけでなく、具体的な事例を示しつつ説明することが望ましい。

(2) 図書館で提供するウェブ情報の有用性を理解させる

一方で、図書館が提供する情報の有用性を理解させることも重要である。

まず、所属大学図書館の資料だけではなく、図書館ネットワーク（ILL サービス）を通じて全国の図書館資料を利用することができることを説明する必要がある。これにより、膨大な量の情報資源を活用できるようになるからである。

そして現在では、電子ジャーナルや各種データベースに代表されるように、ウェブで利用できる有料の学術情報を大学図書館が提供しているため、大学生はそれを活用できることを明確に伝える必要がある。それらのウェブ情報は、大学における学習・研究に欠かすことのできない有用なものであり、図書館がそれらを購入・提供していることについて積極的に周知すべきである。また、これら学術情報資源の全体像を示すことも、理解の一助となる。（図5）

また、論文・レポート作成においては、無料ウェブの情報だけ利用するよりも、有料ウェブ情報を含めた図書館情報資源を有効に活用した方が、高い評価につながると説明することができる。そしてさらに、情報の出典を文献リストとして明記することも、評価を上げるためには重要であると、指導する必要がある。

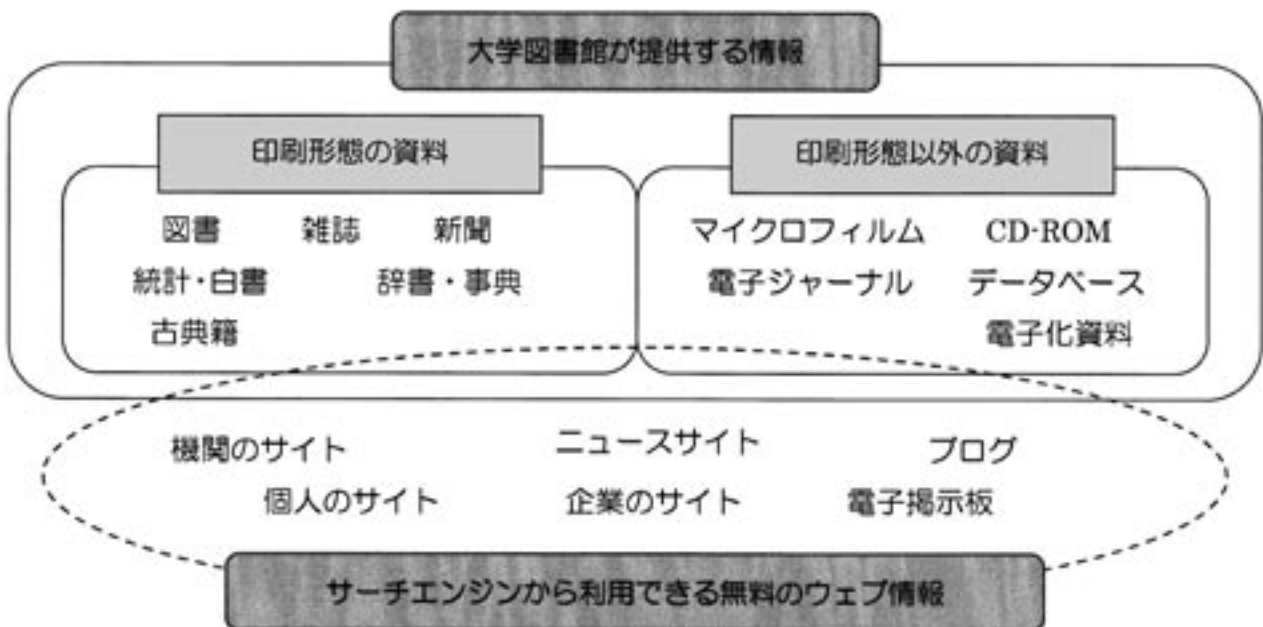


図5 情報資源の全体像（文献2の第1章より）

3. いくつかの視点による見直し

3.1 生涯学習という視点

教科書と講義中心の受動的な学習方式だけではなく、主体的に情報を収集し、意見をまとめていくといった能動的な学習を進めるには、図書館の活用が不可欠である。⁷⁾そして、そのような学習方式を身につけた学生は、社会人となってからも様々な図書館を利用した生涯学習を行うことができるのである。

2003年の国際会議「Information Literacy Meeting of Experts」（チェコスロバキア開催）で採択したプラハ宣言では、情報リテラシーは次のように定義されている。「情報リテラシーとは、生涯学習における基本的権利であり、情報を同定し、見つけ出し、評価し、組織化し、効率的に

創造し、利用し、コミュニケーションする能力と知識である」⁸⁾

先に示した OCLC の調査報告においても、大学生が図書館（オンライン図書館を含む）を利用する頻度やその有用性の認識度は、通常の利用者よりも高いことが示されている。まさに「現在の大学生は将来の社会の在り方を決める社会人となるのであるから、将来のよき図書館形成のために利用者教育は不可欠」⁷⁾なのである。ウェブ主流時代の現在、生涯にわたって情報を適切に利用する社会人を育成できるのは、まずもって大学と大学図書館なのである。生涯学習という視点から、大学図書館における情報リテラシー教育の有用性を認識し、社会的にも重要な活動として取り組む必要があるのである。

3.2 リエゾン・ライブラリアンという視点

大学におけるこれからの情報リテラシー教育では、より大学の教育活動に添った形での展開が求められる。教員や学生とのコミュニケーションを通じて、学部もしくは学科・専攻の教育に適化した情報リテラシー教育の企画設計・実施ができる図書館員が必要となる。

そのような図書館員は、「リエゾン・ライブラリアン（連絡調整担当図書館員）」と呼ばれるであろう。ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校では、教育支援を行うために5名のリエゾン・ライブラリアンを配置し、それぞれ複数の学科を担当して初年時の利用者教育を実施している。ひとつの分野に担当を限定することなく、例えば1名が歴史学・コンピュータ学・保健学・ヨーロッパ学の4分野を担当するといったように、ゆるやかな専任体制がとられている。そしてそのための人材は、修士課程・博士課程のような専門的な高次教育によってではなく、業務を通じた経験によって育成されるものであるという。

リエゾン・ライブラリアンは、広く図書館サービス全般に関して、教育や研究の現場と図書館との間で連絡調整ができる能力をもっており、情報リテラシー教育に限らず次のような図書館活動においても重要な役割を果たすことになる。

- ・機関リポジトリにおけるコンテンツ収集
- ・シラバス指定教材や参考書の整備、シラバスとオンライン目録との連携企画
- ・研究用学術雑誌の選定、学生用図書の選書
- ・特定分野のチュートリアルやパスファインダーの作成
- ・データベースや電子レファレンスの説明会・講習会開催
- ・特定分野・主題の資料を使った図書館展示、学協会と連携した展示会・講演会の開催

特定分野に精通した研究者的なサブジェクト・ライブラリアンを育成することは、我が国の採用方式や人事制度上の問題から極めて困難であろう。それに比べ、主に教育支援という観点で教員と連携し、業務を通じて学生の学習支援を行うリエゾン・ライブラリアンを育成する可能性は開けている。それぞれの図書館員がいくつかの分野を担当し、意識的に上記のような活動を展開できるような組織体制が望まれる。⁹⁾

さいごに

今や大学生の情報利用行動において、検索エンジンとウェブ情報は大きな位置を占めている。

大学の教育に関わる教職員は、この現実をふまえて学生の学習指導を行う必要がある。そしてわれわれ図書館員は、この状況をそれぞれの大学の共通認識とするために、何らかの役割を果たさなくてはならない。そのためには、図書館情報学関係者以外の大学構成員に向けて意識的に、情報リテラシー教育の必要性和グッド・プラクティスを周知・広報する必要がある。¹⁰⁾

そして、教員と大学教育の目的や図書館の目的を共有した上で、教員と連携して、大学における情報リテラシー教育の再構築を行わなければならない。

基本文献

- ・ 野末俊比古. "大学図書館と情報リテラシー教育". 変わりゆく大学図書館. 勁草書房, 2005, p.43-57.
- ・ 野末俊比古. "情報リテラシー教育". 図書館・情報学研究入門. 勁草書房, 2005, p.62-63.
- ・ 日本図書館協会図書館利用教育委員会編. 図書館利用教育ハンドブック. 大学図書館版. 日本図書館協会, 2003, 209p.
- ・ 丸本郁子ほか. 大学図書館の利用者教育. 東京, 日本図書館協会, 1989, 256p.

参照・引用文献

- 1) ACRL, Information literacy competency standards for higher education, 2000 , (インターネット), 入手先<<http://www.ala.org/ala/acrl/acrlstandards/informationliteracycompetency.htm>> (参照 2006-5-11)
- 2) 慈道佐代子. 情報リテラシー教育の理論的枠組みと大学図書館における実践についての考察. 大学図書館研究, 75号 (2005), p.44-53
- 3) 以上のような考え方は、既に大阪女学院短期大学の教員である丸本氏らが実践・報告しているところである。次の2資料は、同様の考え方のもとに執筆したものである。
 - ・ 東北大学附属図書館. 東北大学生のための情報探索の基礎知識. 基本編 2006. 同図書館, 2006, (インターネットでも利用可) 入手先<<http://www.library.tohoku.ac.jp/mylibrary/tutorial/>> (参照 2006-5-11)
 - ・ 東北地区大学図書館協議会. 図書館のすすめ: 大学図書館利用ガイド. 同協議会, 2005, (インターネットでも利用可) 入手先<<http://www.library.tohoku.ac.jp/tohokuchiku/susume.html>> (参照 2006-5-11)次のサイトは、情報リテラシーのプロセス全体を解説した良質のウェブ自習教材となっている。
 - ・ 慶應義塾大学日吉メディアセンター. KITIE: Keio Interactive tutorial on information education, (インターネット) 入手先<<http://www.lib.keio.ac.jp/kitie/>> (参照 2006-5-11)
- 4) OCLC, Perceptions of libraries and information resources: a report to the OCLC membership, (インターネット), 入手先<<http://www.oclc.org/reports/2005perceptions.htm>> (参照 2006-5-11)

同書の内容については、次の書評を参照。

- ・ 米澤誠. 書評・新刊紹介「Perceptions of libraries and information resources: a report to the

- OCLC membership」. 情報の科学と技術, 56 巻 5 号 (2006), p.244
- 5) B.L.ホーキンスほか編. デジタル時代の大学と図書館. 町田, 玉川大学出版部, 2002, 370p.
 - 6) 高鍬裕樹. デジタル情報資源の検索. 東京, 日本図書館協会, 2005, 89p.
次の資料の中の「検索エンジンの落とし穴」(p.13)の説明も, 簡潔にして要をえている。
・東京大学情報基盤センター学術情報リテラシー係. ネットでアカデミック: 学術情報へのアクセスガイド. (インターネット) 入手先<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/manual/net2006_j.pdf> (参照 2006-5-11)
 - 7) 丸本郁子ほか. 大学図書館の利用者教育. 東京, 日本図書館協会, 1989, 256p.
 - 8) Specser Thompson, Information literacy meeting of experts, 2003, (インターネット),
入手先<<http://www.nclis.gov/libinter/infolitconf&meet/post-infolitconf&meet/FinalReportPrague.pdf>> (参照 2006-5-11)
 - 9) 米澤誠. ウェブ主流時代における情報リテラシー教育再構築の試み. 薬学図書館. 58 巻 3 号 (2006) 掲載予定
 - 10) 米澤誠. 検索エンジン主流時代だからこそ必要な図書館利用者教育. 東北大学附属図書館報: 木這子. 30 巻 4 号 (2006), p.22-25, (インターネット), 入手先<<http://www.library.tohoku.ac.jp/kiboko/kiboko.html>> (参照 2006-5-11)